HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	未完結文における語用論的選好に関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	劉, 暁苹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12076号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61593
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Xiaoping_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　劉　　暁　苹

主査　教　授　加　藤　　重　広
審査委員　副査　教　授　野　村　　益　寛
副査　特任教授　小　野　芳　彦

学位論文題名
未完結文における語用論的選好に関する研究

本論文は，日本語の未完結文を扱った研究として基盤的な枠組みから個別の事例分析まで幅広く論じた，大部の労作である。本文のみで 260 頁，原稿用紙換算 950 枚分にあたる。

広く先行研究を踏まえて，いくつかの観点から詳細に議論を行い，未完結文における要求性や境界性を論じた点では新しいテーマと知見をもたらしている。統語語用論の基礎知見として，話し手が発話内力を発話行為で利用する点を，発話の聞き手に対する要求性として整理し直し，要求性が発話行為である以上意図しなくても有する無標の要求性と，発話意図を反映して発話ごとに設定される有標の要求性に二分されるとした点は，言語学的な方法論をよく理解しており，今後の他の研究にも活用される重要な提案である。また，述部構造や文構造あるいはテクスト構造については境界性を設定する論考が先行研究にあるが，未完結文の非従属部（接続助詞の周囲）に着目して境界性を提案した研究はこれまでに見られない。これらの新奇性は，分析の実質に資するにはいまだ工夫の余地があるものの，重要な貢献になっていると評価された。

第 5 章から 7 章では，未完結文の形成過程における「正の動機・負の動機」，話者交替適切場（ＴＲＰ）の強さが関わることを，先行研究を踏まえた上で発展させて整理している。正の動機と負の動機は，先行研究で提唱された，言語変化を起こす動機の区分であるが，未完結文を用いることを選択させる動機が正の動機となる。これを本論文は，伝達の経済性であると喝破した。通常の完結文を接続助詞の不可などで未完結文にするにはあまりコストがかからず，未完結文にすることで命題的解釈のほかに解釈のメタ情報を付加することが可能になり，読み取れる情報は増大するのであれば，最小コストと最大エフェクトという経済性が発揮され，それが未完結文を使用させるというのである。同様に，未完結文以外，すなわち完結文を選択することを回避させるのが負の動機であるが，本論文はこれを会話における話者交替時の緊張の回避・緩和，また，会話参加者のフェイス侵害回避というポライトネスのストラテジーが関与することを指摘している。話者交替時の会話参加者間の緊張関係にＴＲＰにおける交替容易性が関与することを主張し，あわせて，実際の例を用いながら，分析している点も実証的で層の厚い研究であることを示している。これと関連して，メタポライトネスという概念を提唱した点も新しい成果と認めることができる。

また，未完結文を省略形成と付加形成の 2 種類に分けて詳細に分析した点も重要な功績と言える。日本語の非従属化で省略以外に付加があることは先行研究で指摘があるが，具体的にこの 2 つの類型ではどのような違いがあるのかを実例分析を以て示したことを。従来の研究を大きく進める重要なポイントであると認めることができる。助動詞の省略が慣習化している点の具体的分析をはじめ，引用の標識が緩和の機能を持ち，その機能を前面に出して談話標識化していくことについても重要な指摘がある。

上述のように，重要な研究成果をいくつも残しているが，その一方で，因果関係の論理的な解釈に恣意的な部分が見られるほか，新たな成果としてのメタポライトネスもまだ発展させる余地

がかなり残っており，未完結の標識が談話標識に転ずる変化についても先行研究を恣意的に理解している点があることは事実である。ただ，これらの問題点を考慮しても，日本語の未完結文の研究としては今後参照することが不可欠と言ってよい，重要な成果であることにはわりがなく，本研究テーマと関連領域を含む統語語用論の研究全体を発展させる上で重要な貢献をしたことは明かである。

加えて，国際学会・全国学会を含む 8 件の研究発表と査読あり 3 編を含む 7 編の論文があり，着実に研究成果を積み上げた上で，本論文を完成させている点，また，日本語非母語話者として，母語話者でも説明が容易でない微妙な差異を掘り下げて細かに論じている点も評価に含めてよいであろう。審査委員会では，５回に渡る委員会で詳細な検討を行い，口述試験を課した上で，審査委員が全員一致ですぐれた学位論文と評価し，博士の学位授与が妥当であると判断したものである。

以上